

筆舌に尽くし難い、悲しい事実

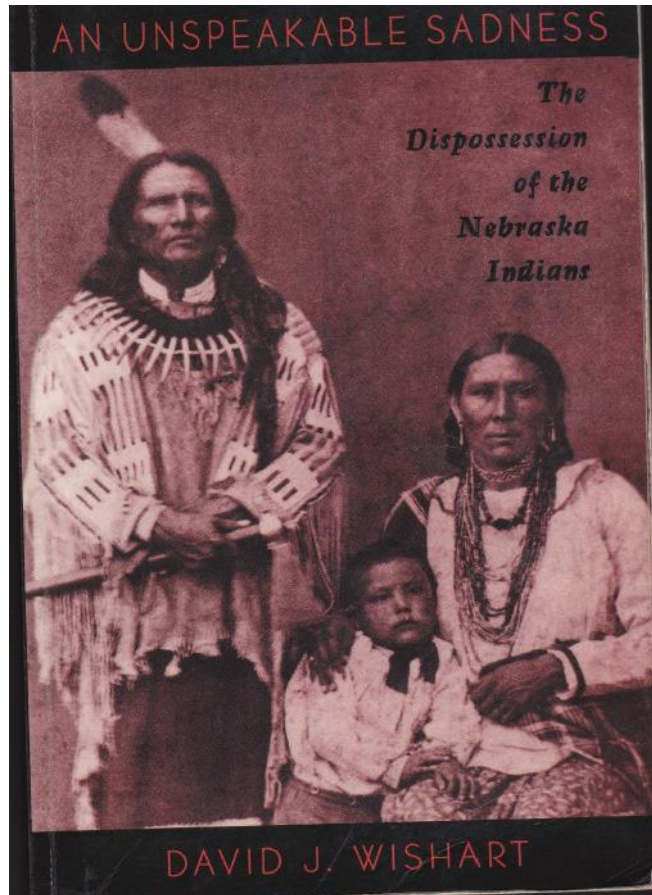
（アメリカの歴史の裏に隠された物語）



David J. Wishart

鈴木誠二訳 より

An Unspeakable Sadness



David J. Wishart

1800年には、少なくとも14,000人のアメリカンディアンが、現在のネブラスカの東部半分の地域に住んでいた。……(中略)……部族は、は30百万エーカー以上の土地を統治していたのである。それから百年の後のこれらの、もともとネブラスカに住んでいたインディアン達の数には、わずか、オマハ族が1,203人、ポンカ族は、229人の人たちが彼らの故郷に残り住んでいるに過ぎず、彼らの統合された所有地は、たったの200,000エーカー程度になってしまった。

アメリカ人とヨーロッパ人の移住者達—1900年までに、およそ100万人とも言われる—が、立ち退いた土地に溢れ、そして、大平原に囲いをつくり、表面の土地をひっくり返し、鉄道を敷設し、町をつくり、そして、数えたらきりが無いほどの様々な方法で、そこにもともとずっと住んでいた古いインディアン達にも全く想像もつかないような形の大地に、様相を変えてしまった。

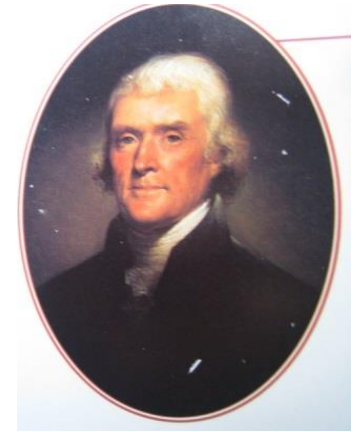
この本は、土地の没収のこの一世紀の物語を語るものである。

LOUISIANA PURCHASE

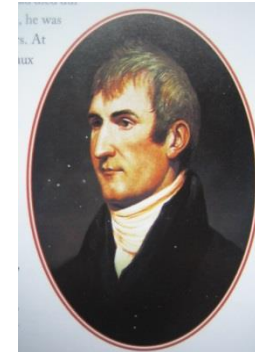


ナポレオンは、ミシシッピの西にあるその土地は、合衆国を“この後、ずっと強力にする”、だろうと予測していた。“私は、イギリスに対して”と、彼は続けた。“遅かれ早かれ、その誇りを損なうようなライバルをプレゼントしたのだ”と。

こうして、いまや、紙の上では大陸の西の半分は合衆国となったのである。



Thomas Jefferson



Meriwether Lewis,
painted by Charles
Willson Peale.



William Clark, painted by
Charles Willson Peale.

オレゴンの先まで探検と調査
大陸の横断
原住民インディアンの調査

Lewis & Clark 隊との出会い

SOUTH
DAKOTA

ポンカ族

NEBRASKA

IOWA

KANSAS



1804

7/22 Lewis & ClarkがPlatte 川の河口に着いたときには、インディアンの部落はもぬけの殻だった。

オトエーミズーリ族
オマハ族
ポンカ族
ポウニー族

8/6 オトエーミズーリ族の6人と接触

“偉大なる父”……アメリカ合衆国
“苦難の子供たち”……インディアン

平和とアメリカ人の
川への通行の安全性



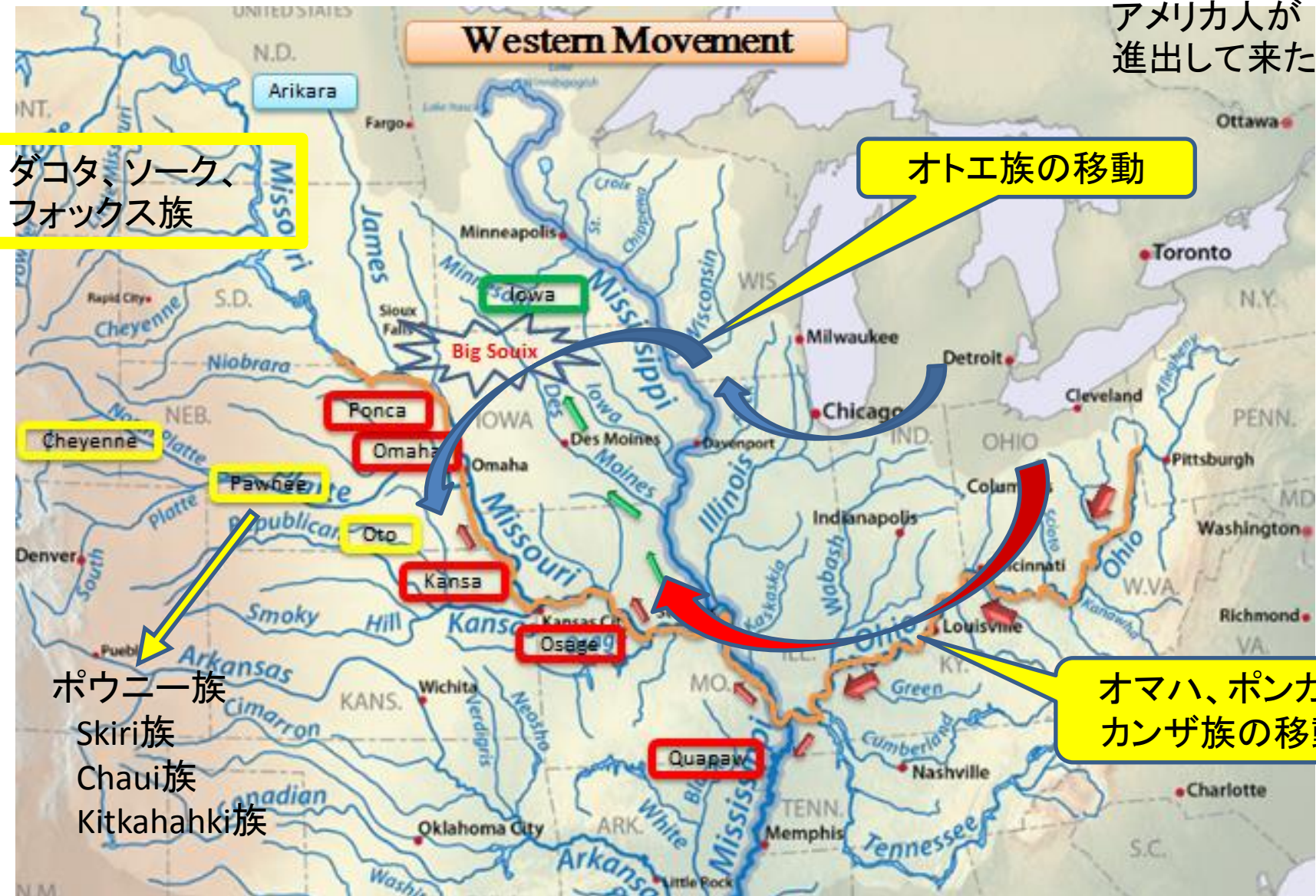
インディアンの居住地を認める

ミズーリ川

“悪い鳥たちとの会合”には、耳を傾けるな……フランスに対抗
彼らは、“大草原の草を焼き尽くす火のように”破壊する

Lewis & Clark 以前

18世紀後半
ヨーロッパ人、
アメリカ人が
進出して来た。



ポウニー族の

Skiri族は、Loup川のテラス台地、Chaui族は、Platte川の南側、
Kitkahahki族は CloudとGuide Rockの間のRepublican川)

オトエ族

Little Souix River の Missouriの東側の土手に居たものが、Dakota族に
追われて南下し、Platte川の河口近くで、ミズーリ族と一緒に暮らして居た。

オマハ族

ポンカ族、カンザ族、クワポー族、オサゲ族ら もともとはSouix語を話す
同じ系統の部族。オハイオ川を下り、南下。ミシシッピーに行き当たり、ここで
分かれた。オマハ族は、オマハ族とポンカ族は、一端、ミズーリ川の東側に居
たが、されら西に進み、ポンカ族は、Niobrara川の河口付近、オマハ族は、ネ
ブラスカをさらに南下し、St. James 近辺のBow Creekに。

その後、ダコタ族に追われて、Omaha Creekに移動した。

ポンカ族は、

Niobrara川の河口付近に居住していた。



1790～ 天然痘が大流行し、人口が大胆に減少

1800～1801年に再び大流行。 狩に行けず、“流浪の民”となった。

“名誉ある死”の選択

銃の入手が武力の勢力分布を変えた。

部族同士の戦い、 ポンカ族、シャイアン族、ポウニー族、オトエ族と戦う。

この頃、ヨーロッパ人が馬をもたらした。 サンタ・フェを襲撃し、馬を手にいれた。(ポウニー族)

ダコタ族の襲撃する地域が拡大

トウモロコシよりもバイソンの時代

ポウニーはトウモロコシを崇めていた。

先祖伝来の土地 広がった土地の所有権を主張

ポンカ族……Black Hills のもっと先(西)まで

テト・ダコタ、オマハ、ポウニー はSand Hills の地域

オマハ族……アーカンソーに通ずる道を首長 これには、コマンチ、シャイアン、

アラパホ、カイオアが反論



インディアンの村の形態

村の生活

「村」と言うのは、
“地理的に境界の設けられた、非常な大きな広がりを持つ家族”
周りの部族に対する統一的な対処の仕方を持つ集団

オマハ族

Sky 集団の人々 と Earth 集団の人々
父方の系列で子孫につながっていた 5つの血族
二次的な準分属が居た。
血縁外結婚を推奨していたが、村の中に限る。

ポンカ族

7～10の血族があった。

オトエ族

10程度の血族があった。

ポウニー族

村には、“包み”があり、これが求心力となっていた。



階層

酋長

現世のこと

僧侶

儀式と神の力の利用

戦士

呪術者

弓矢職人

その他



女たち

虐待と過重労働。

労働は女たちの仕事である。
生活の中では従属的な役割。

ただし、小屋のなかの家財道具は一切女の持ち物
自分の夫の社会的な地位の確保のための内助
ものをつくる技量、家族の富の蓄積・・・これらは女の裁量

男たち

狩猟、防護、襲撃、兵器の製造が主な仕事
儀式、村社会の政治的な事項の決定

村の生活

Skiri 族(ポウニー族)

トウモロコシの植え付けの儀式

四つの轡のついたトウモロコシの実

5月

女たちは整地、草木の焼き払い

トウモロコシの植え付け。
囲い 柳の小枝、大きな畝をつくり、ここにひまわりを植える

6月の終わりと7月の始め

バイソンの狩猟

8月の終わり

10月の始め

アキノキリンソウの咲く頃に、村に帰る。
トウモロコシの刈り取り

トウモロコシの収穫

乾燥、実の掻き取り

バイソンの狩猟が始まり、トウモロコシに変わった。

インディアンの月の呼び名	
月	オトエーミズーリ族
January	アライグマの交配期
February	川カエルの月
March	何もしない月
April	鋤で耕す月
May	芽を出す月
June	畑を耕す月
July	バイソンの交配期
August	エルクが吠える月
September	鹿の作った窪みの霜
October	鹿の交配期
November	牡鹿の角が裂ける月
December	熊が子供を生む月



ネブラスカインディアンの狩猟地

Brule Dakotaと敵対



不安定の始まり

大平原にヨーロッパ人やアメリカ人がなだれ込んできた。

スペイン人が馬を持ち込んで来た。

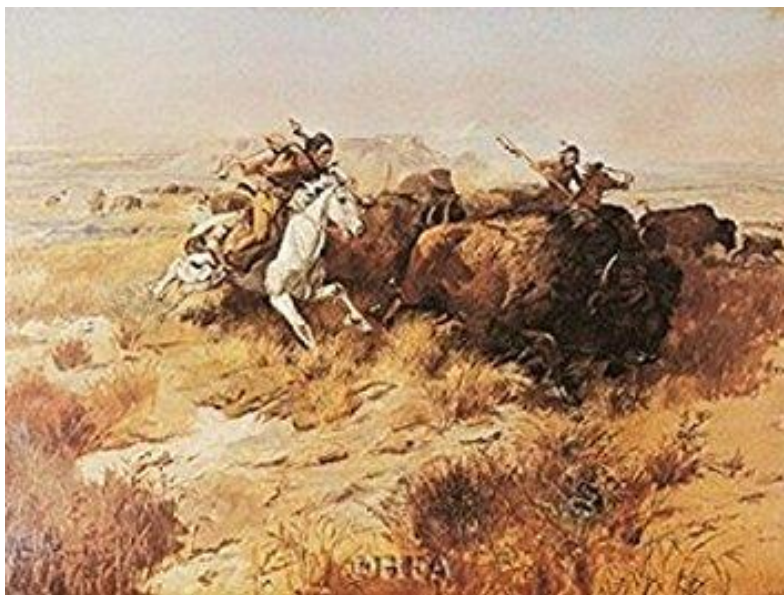
セントルイスからありとあらゆる
商品が、病気と共に



バイソンの取り合い

敵との遭遇

村の襲撃が多発



酋長による取引の独占



戦闘

と

病気

人口の減少と防護の必要性



村の結合

新しい村の中で、酋長同士、血族同士の対立が
起こった。



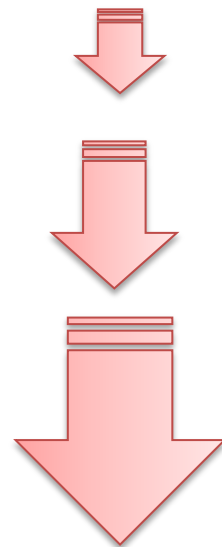
19世紀までは、インディアンの生活の手段、
社会のしくみが崩れなかった。

狩猟、栽培、野生の植物など、食料の確保
が出来た。

沢山の馬が手に入った

経済活動の範囲が広がった

オレゴン、ユタに向かう再入植者たちが
ネブラスカを荒らしまくった。



派閥争い
村の生活の上層部の亀裂



分裂

村の生活の本質的な強さ
聖なるパイプ
神聖な杖
神聖な包み

調停の圧力の時代 1800～1854年

文明化の波

アメリカ文化(政治、経済的力)を
インディアンに押し付ける

入植地の白人

毛皮商人

2～3百人

宣教師

30人足らず

インディアン代理人

11人

Lewis & Clarkの旅



経済的活動が大爆発した導火線となった

1818～1822の間にバイソンの姿が消えた

蒸気船がミズーリ川を通行
新しい取引所

毛皮の取引が、ネブラスカのインディアンより、
もっと奥にいるダコタ族が中心となった。

取引商たちは、古いインディアンの方
が、よい取引が出来た。

アルコールをちらつかせ、
インディアンを狩に駆り立て
宣教師たちの活動の邪魔をした。

合衆国政府の方針

Dougherty 1829

インディアンが農耕できるような小さな土地に住むようにさせ、獲物のいないような場所に定住させる。

インディアンの自立を促し、狩猟をしなくなった時の支援を軽くすることが出来る。

土地の交換

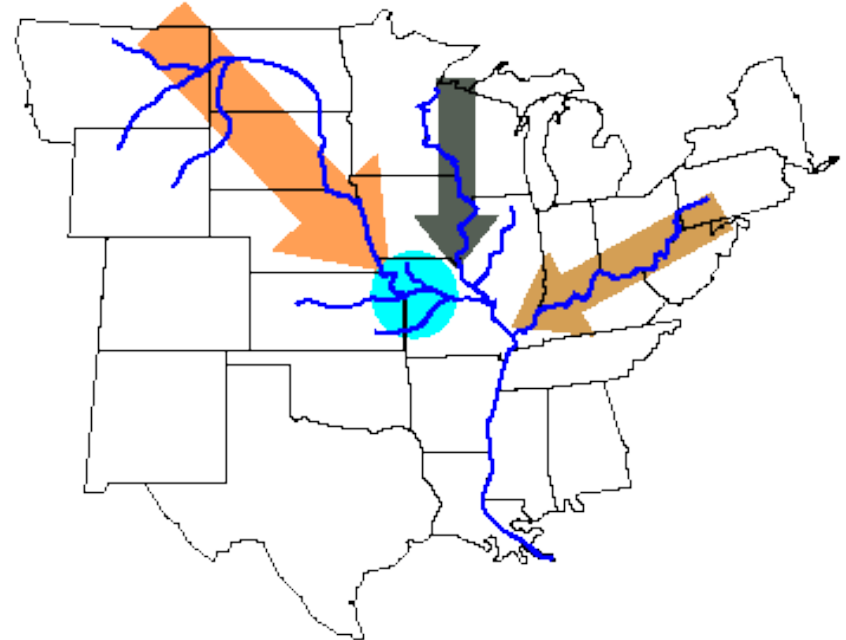
領土拡張主義



キリスト教化

インディアンの土地を手に入れる。

インディアンを飢餓から救済する。



保護居留地……定住することを義務付けられた。
ミシシッピー川の西の地域から、保護居留地に
強制的に移住させられた

狭い土地に閉じ込められた。

インディアン達の立場をますます低下させ、インディアンが厳しい形で、開拓地から移動させられた。

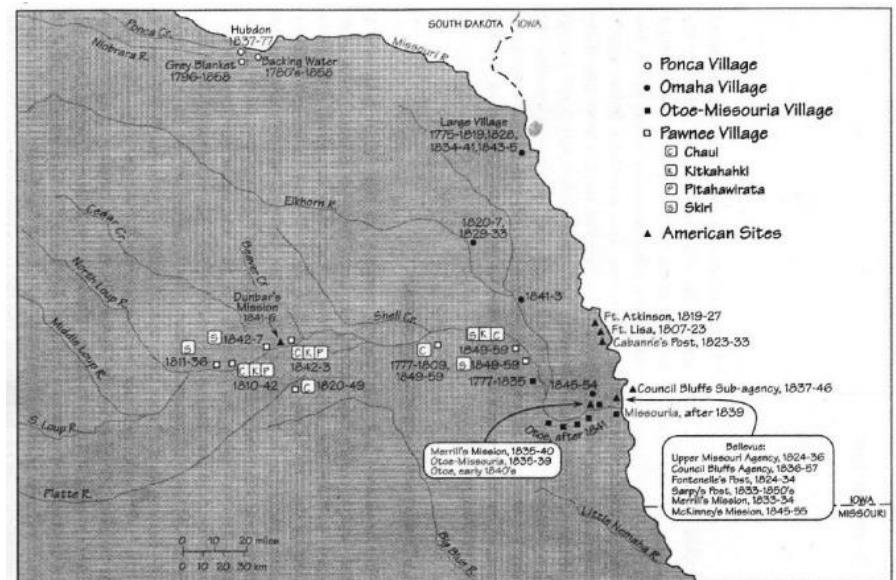
その土地の“法的な先住民”とみなされていたが、
彼らの所有権は、
“征服者の権利”により、消失した。

原住民たちの土地の植民地化と、
インディアンの追放が始まった。

1830

Prairie du Chienの協約

“今こそ、土深く、戦鬩斧を埋める”
時である。



インディアンとアメリカ人の分布 1800～1854

1820～1830にかけ

西部開拓から、ゴールドラッシュの時代

毎年、夏になると

中央ロッキー山脈に向かうキャラバン隊が
Platte川、Sweetwater川に沿って旅をしていた。

1840年 ネブラスカを越えて、13人が
 オレゴンに向かった。

1845年 これが、5,397人になった。

1847年 モルモン教徒

1850年 ゴールドラッシュ 98,284人

木々を切り倒し、
草原の草を食べつくし、
狩猟する動物をことごとく追い払った。

ねだり と 盗み

この街道にはポウニー族が居た。

生き残るために自分たちの土地を売却。

1836

大平原の買収

ポウニー族の地に、デラウェア族を移住させた。

インディアン同士の衝突

1831年に天然痘が大流行

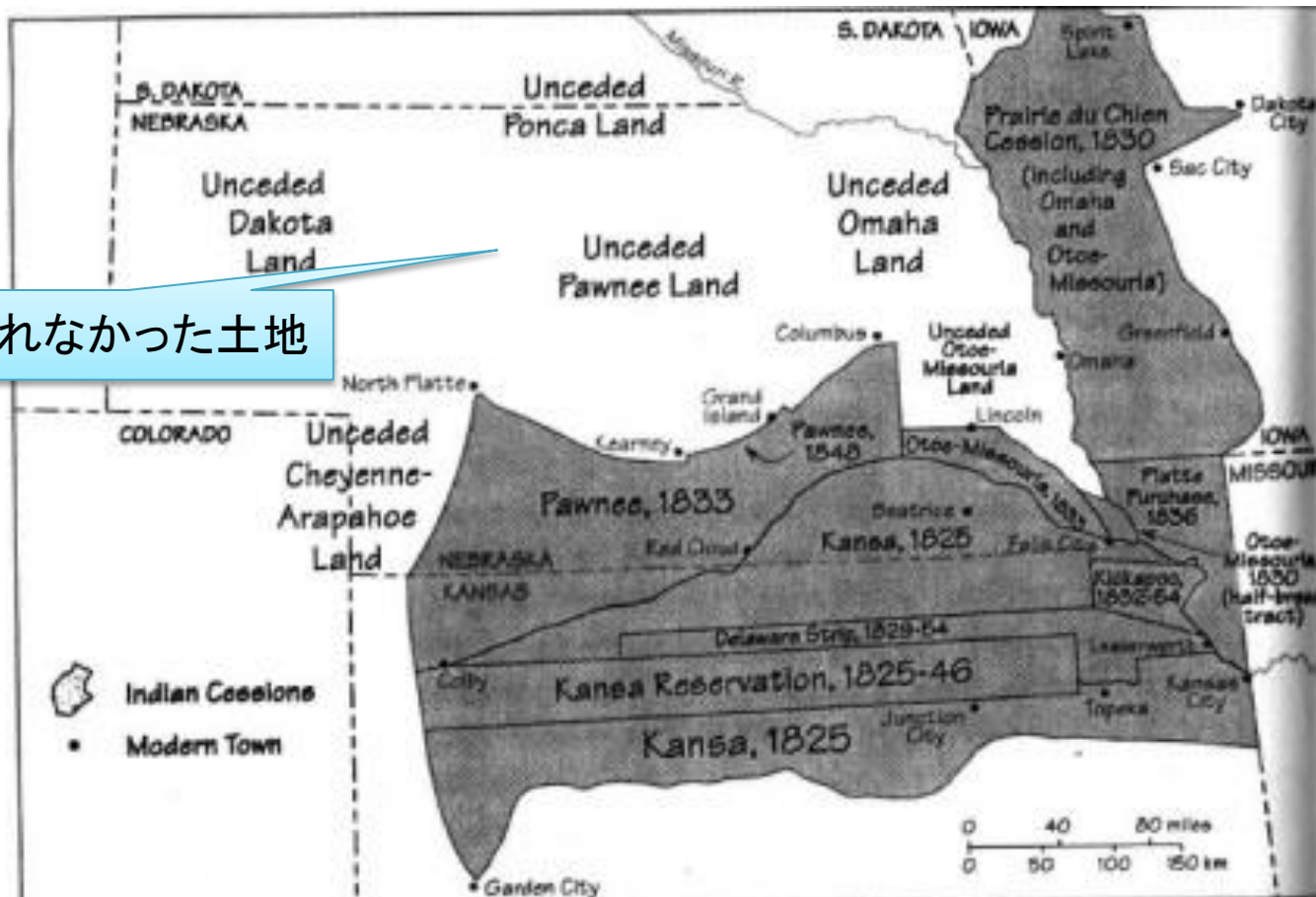
ポウニー族は人口が半減

Platte川の南にある自分たちの土地

“権利と利益と、そして、所有権”を失った。

所有権の放棄の見返りに、保証金と農機具





譲渡されなかった土地

1830年代、ならびに、1840年代の土地の譲渡

入植してきたアメリカ人のために、アイオワ、ネブラスカ、カンザスにかけて、インディアンの居留地は二束三文で次々に割譲されていった。

襲撃

ダコタ族

融和政策

ダコタ族を鎮圧する力がなかった。

ネブラスカインディアン
ポウニー
オマハ
ポンカ

合衆国
政府

保護と鉄砲を要求したが、
約束は守られなかった。

ポウニー族は土地を売却

西部への移住が堰を切った。

年金に頼る時代
一年を通じて定住していないと年
間が支払われない。
取引商たちの腹に収まった。

そして、また、売却の繰り返し

20世紀 再検証

人口の回復

オトエ・ミズーリ	1,400
オマハ	1,500
ポウニー	2,300
南部ポンカ	2,200
北部ポンカ	400



文明化(アメリカ化)という嵐のあと
大切な物が、博物館から各部族に戻された。

オトエーミズーリ族には、追加の土地が購入された。

北部ポンカ族 部族としての地位が回復された。

二次的な補償の
19世紀の不公平な価格、土地の強奪に対する訴訟の成果

インディアンの訴訟委員会

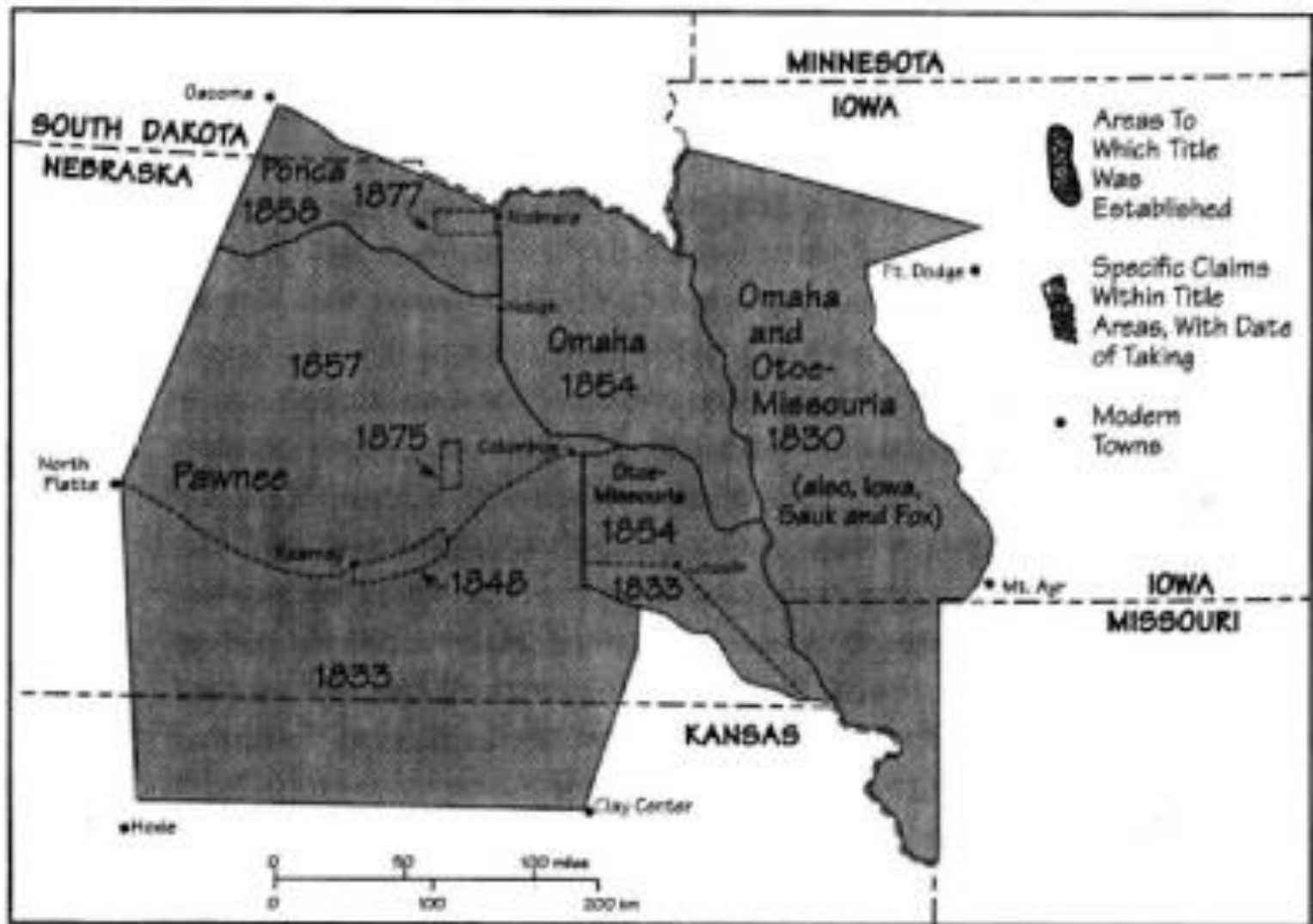
1946年以降、初めて、“遅れながらの正当性”を求めていく委員会の設立

19世紀に売却した土地に対する追加の支払いを勝ち得た。

伝統的な所有地の境界が明確にされ、各部族間での対立が無くなった。

ポウニー族の土地の売却

もともとの土地の所有者であること
売却により受け取った金額が極めて低かった
協約そのものが脅迫のもとになされたこと
を証明できた。



ネブラスカ インディアン達の伝統的な所有地 インディアンの所有訴訟委員会による

ポンカ族は、十分な成果を上げることが出来なかった(1972年まで)……→ 訴訟を継続
その結果

ポンカ族を苦しい立場に追い込んだのは、合衆国政府の無策によるものであると認めさせた。

もし、公平な
支払いがなさ
れていたなら

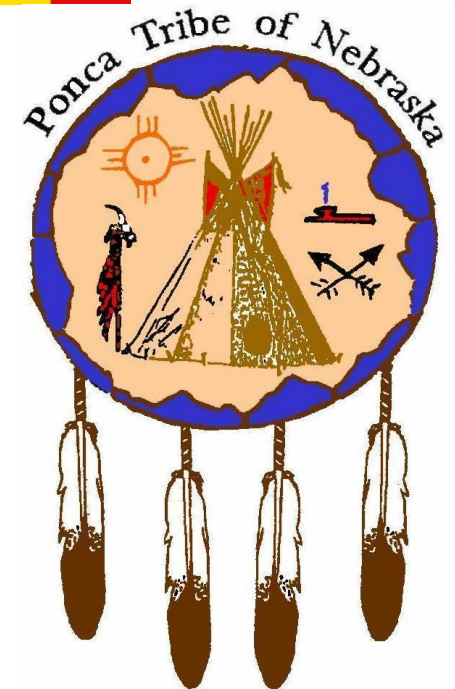
インディアンは苦しまなくて済んだ

再分配地への移住を容易にした

保護居留地の一部を売却する必要はなかった

個々の部族の実態は・・・・・・・・・・？

ポンカ族



追い立てにあい、分裂した悲慘な部族、 だが・・・

ポンカ族

独立の兆し 1800～1854

1800～1801

天然痘の大流行

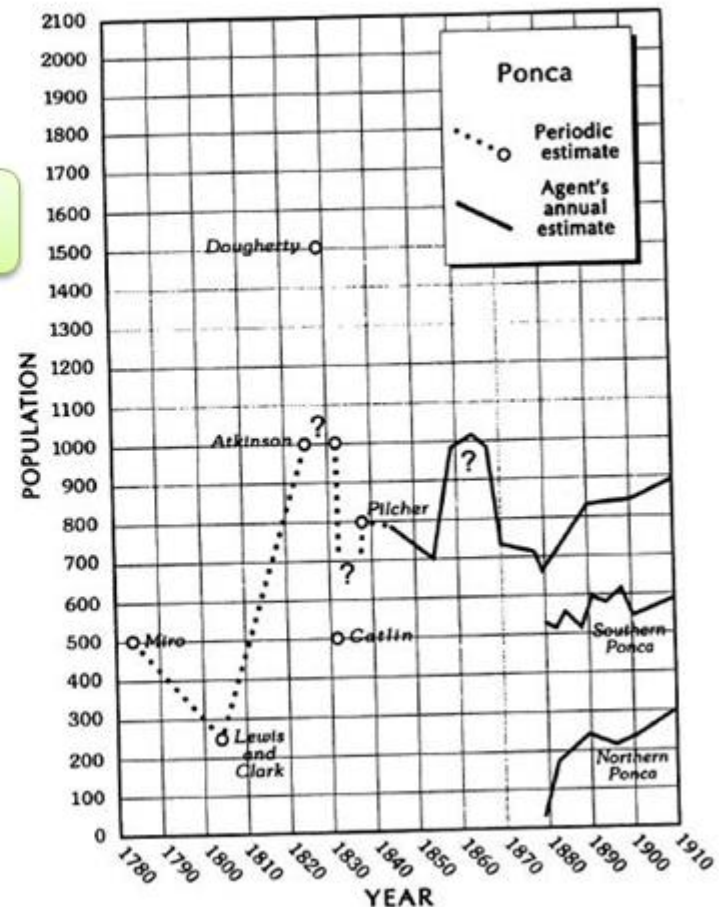
1820年 1,000 人

1831 天然痘が再び大流行

飢餓状態とダコタ族の襲撃で
村が崩壊

テトン・ダコタに身を寄せた。

保護居留区への移住
獲物となる動物の激減
飢饉



1840～

暗い時代

1840年以來 新しく移住して来たもの、新しい部族が加わったものの、人口は減少

ミズーリ川北西部から → 西へ

バイソンがだんだんいなくなる。 上流の部族の狩猟

ダコタの一部の部族と一緒に狩をし、ポウニーやオマハ族を襲撃していたが、自分たちも、他のダコタ族の襲撃を受けていた。

他のダコタ族からの襲撃に備えて、モルモン教徒と一緒に冬を過ごしていた。

ポンカ族は乗馬に長けた部族で、狩が上手であったが、

→ 部族内での分裂が起きた。



保護居留区への強制移住 1854～1864

1854 カンザス・ネブラスカ条約

年金と保護居留地と交換に残された
土地のかなりの部分を売却

1857 入植者たちが溢れてきた。

ドイツ
イギリス
アイルランド



オハイオ
ニューヨーク
ペンシルバニア
インディアナ
イリノイ
アイオワ



ネブラスカ
オマハシティー
ネブラスカシティー
ベルビュー

肥沃な土地と言う過剰報道

問題はオマハ族が
ポンカ族の先祖
代々の土地と言う
地域を売却した。

世界経済の不況

ポンカ族には年金の支払いが少ない

入植者たちとの衝突の危険性

1857 陳情団を派遣

ポンカ族は、政府の援助を十分に受けていないと首長下が、
無駄だった。(Whip 大酋長)

望んだ土地の代償として、
Black Hills の西部地域を所有

この土地は、オマハ族、ダコタ族も
領有権を主張していた。

1858 ポンカ族は
Niobrara川とPonca Creekの間の地域
58,000エーカーを売却
(東京都23区のca1/3)

The Drum 酋長が留守をしていたが、代表団がワシントンにいる間にNiobraraの状況が険悪化
食料が殆どなくなった。
若い男達が暴走
騎兵隊が出動

→ 保護居留地への移住

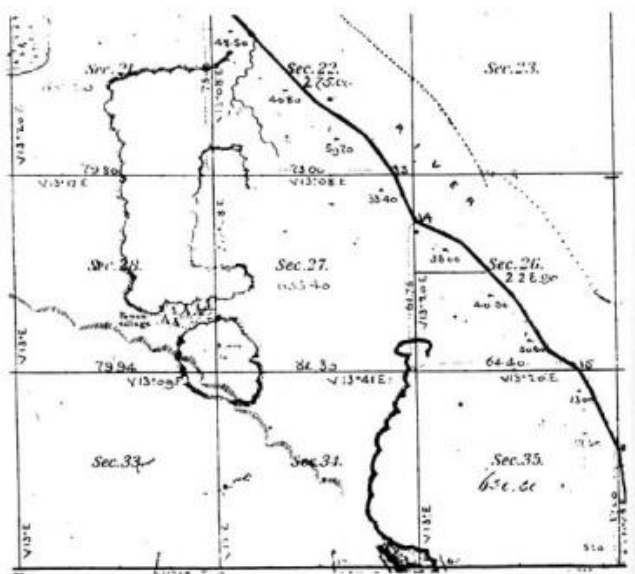
1858 冬は獲物は殆どなく、トウモロコシは底をついた。

1859夏 Bruleの襲撃が相次ぐ
ティピーの破壊
馬の略奪
食べ物の略奪

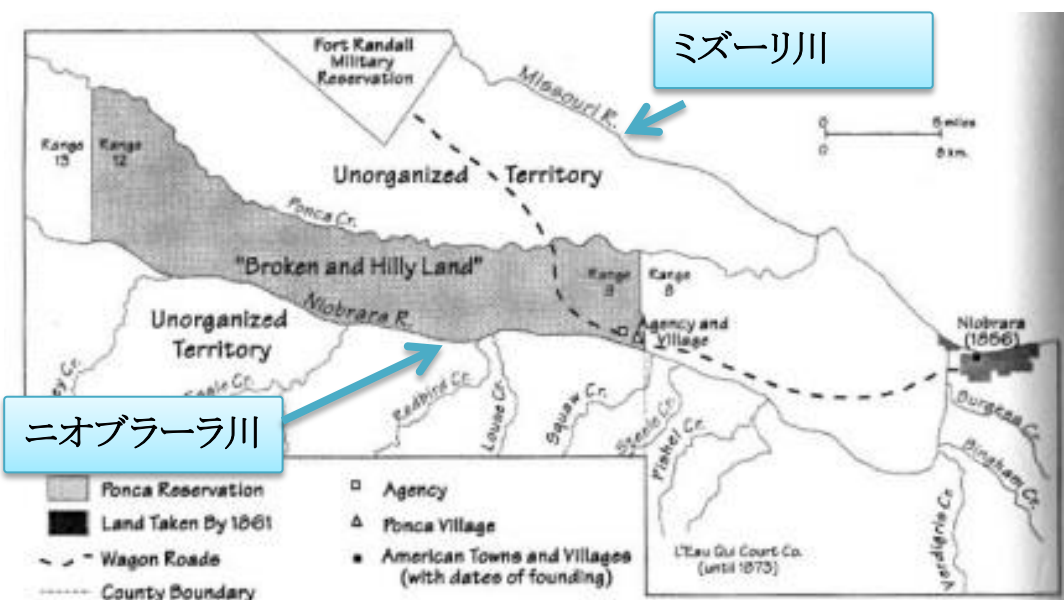
Brule
Omaha
Pawnee } が、Ponca 族の追い出しを
はじめた

ポンカ族は、Niobrara の西に逃げた





ポンカ族の村(1858)



ポンカ族の保護居留区(1861頃)

提案された保護居留区は、“十分な木も茂っていないし、また、彼らが自給できるほど土地は肥沃ではなく、ここは、総合的に考えるとインディアン達が生活するには適していない”

・・・Gregory 特別行政官

“われわれは、決して、その場所に行きたいというのではない”・・・Hard Walker

“川の辺の故郷で死のうではないか”・・・The Whip

保護居留地での生活

ポンカ族は、土地の所有が法的に認められなかった。

深刻な権利の侵害者の犠牲者だった。



1870までに、人口が、750人に減少

ポンカ族は、

友好的、法を良く守り、行儀のよい部族
との評判だった。



1860 Bruleの襲撃し放題

トウモロコシの種まきはしたが、
干ばつとバッタに荒らされ貧困状態



オマハ族とポウニー族が余った
トウモロコシを寄与した。

1862～1864の夏の狩は成功

1864 ウィネバゴ(ウィスコンシン、アイオワ、ミネソタ
辺り)が、追い出されダコタに移ってきた

1867,1868,1869とバッタの襲来

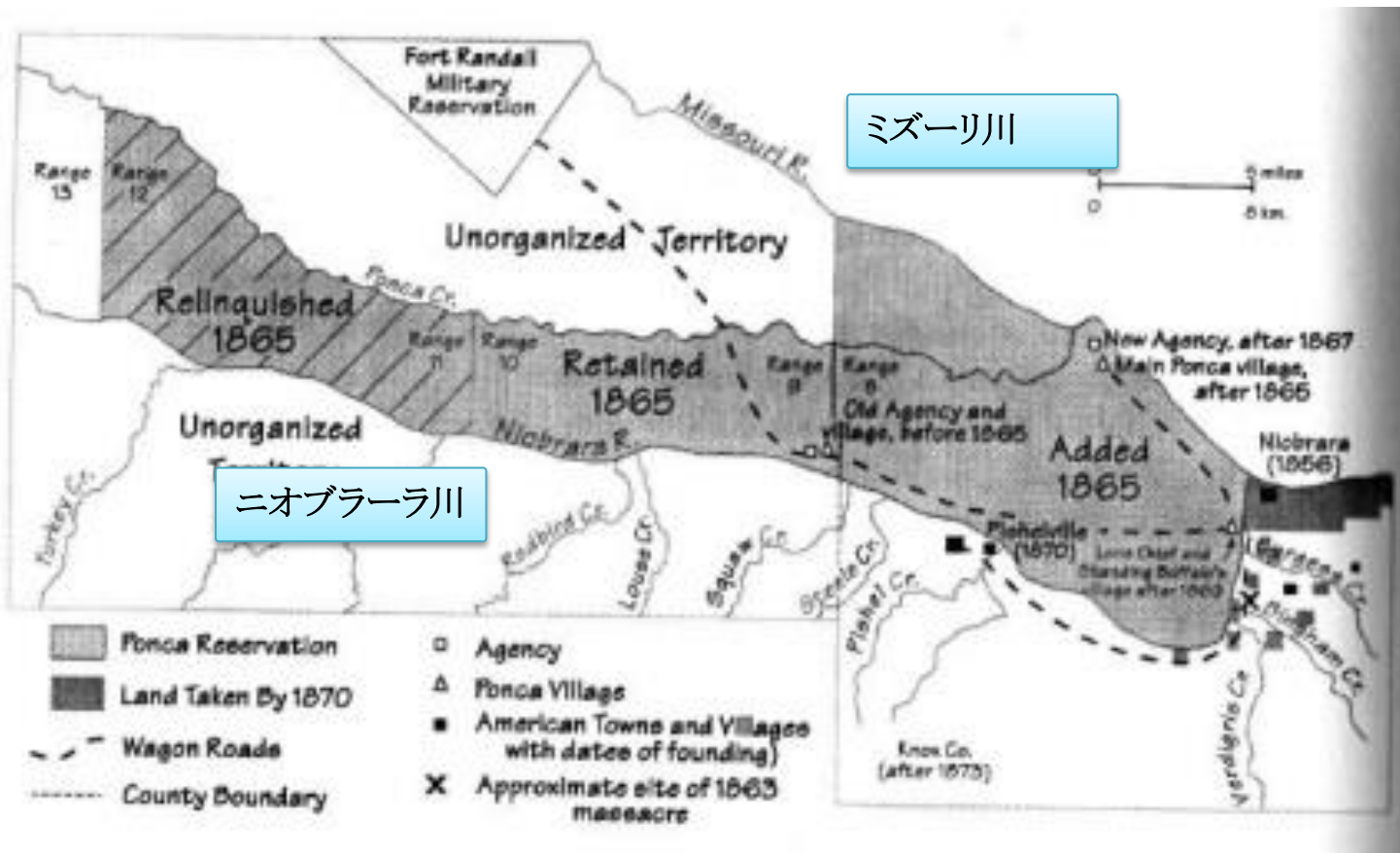
1869 Bruleの襲撃、狩の妨害



困窮、飢餓、壊滅状態



合衆国から新しい支援を引き出すために、保護居留区
の土地の売却をしなければならない。



ポンカ族の保護居留区(1870頃)

閉じ込められ、そして、追い出された時代 1870～ 1885

病気、飢餓、死亡
入植者に囲まれ、

真っ逆さまに

土地を分配するか、
インディアンに強制区域に移るか

真っ逆さまに変化を遂げた時代

合衆国政府

バイソンを消滅させ、……政府の条件に合わせる

鉄道網が広がり、……入植者が激増

インディアンに残された土地……保護地域だけ

1873 Timber Culture 条項

土地の取得条項で、向こう10年間の支払い猶予

税金は要らない……> 公共の土地が殆どなくなった。

“土地は企業心に富む人達の手に移る道を開くべき”・・Funas

政府は、 “命令的になった”

1. インディアン達が、年金を貰うために労働を強いられた子供たちを学校に入れる
行政官の命令に従うように。
2. インディアンを強制区域に拘束する

ポンカ族の追い立て

1868～

行政官の区域……1/3は、Antoine Primeauxの血を引く

89家族 混血の人達

1873 川の土手が破壊され、村が流された。

Hubsonの地域……Standing Bearの部落

144人

Niobrara川の土手の北側地域……White Eagle, Standing Buffalo

Point Village 250人 いつもBruleの襲撃を受けていた

1870に最後のバイソン狩

Brule族の襲撃があり、行政官は狩を認めなかった

1873

雪嵐

Brule族は、ポンカ族を自分たちの捕虜と考え、毎年、春になると襲撃を繰り返していた。

政府は、

食料支援と引き換えに、労働を強制

働かざる者には、小麦の支給がなかった。

年金は、1858～1873までされていたが、しかし、

飢饉や、遠隔地であるため、価格が高く、食料や衣料を殆ど手に入れることが出来なかった。

政府は、ポンカ族に対して、彼らを守る手立てを提供することには、はっきりと反対していた。

ダコタ族には、鉄砲を提供していたが、ポンカ族の鉄砲要求は、無視していた。

ポンカ族を極貧に追い込み、

有能な酋長を辞めさせ、

部族を弱体化し、

保護居留区に強制移住させる。

ポンカ族の中の内部紛争

ポンカ族には混血のものが多く、この人達は、白人の手先とみなされ、純粋なインディアン達との間で諍いが起きた。

Le Reverと No Knife の決闘

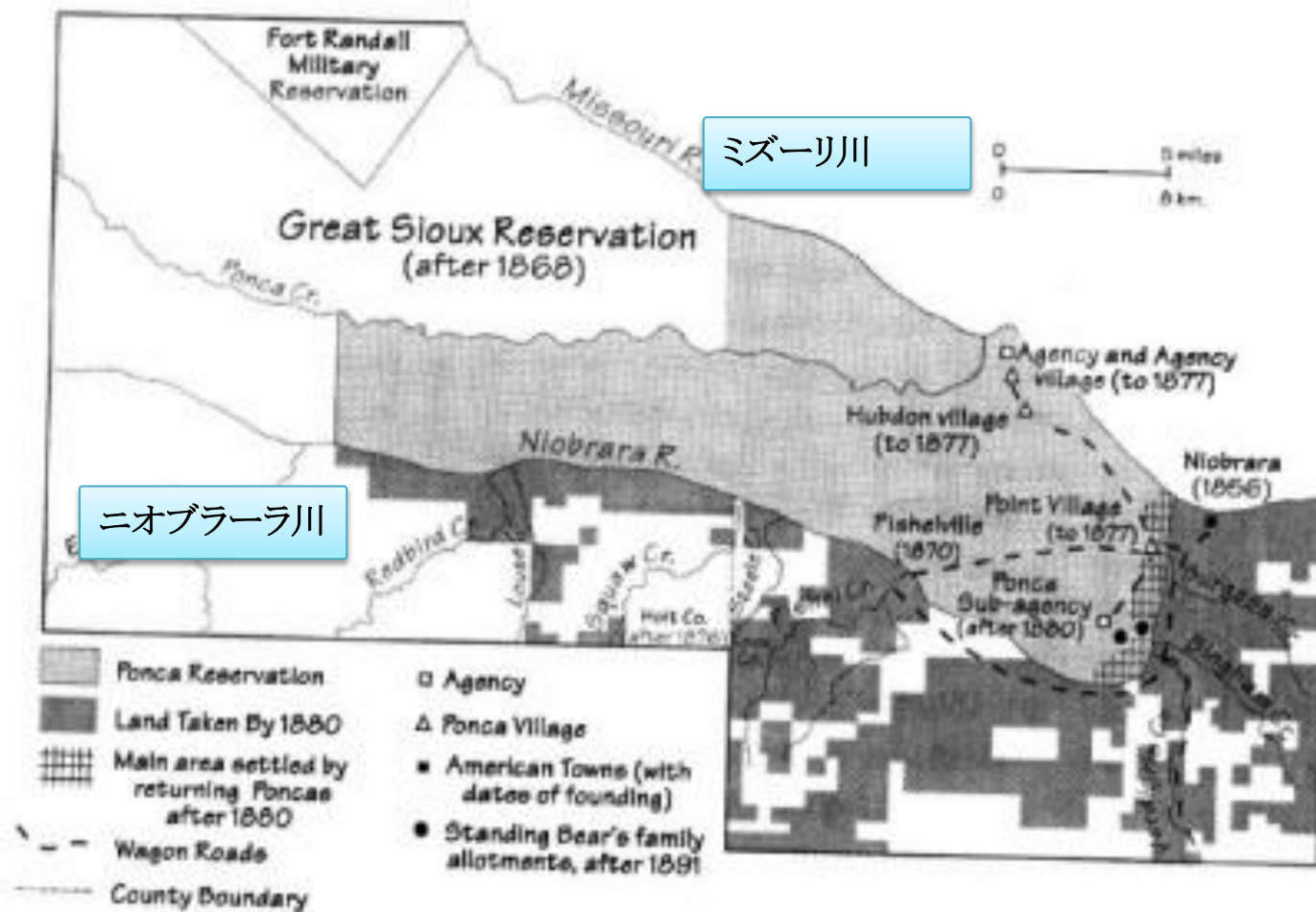
1873 ポンカ族の追い立ての提案

1875 Smith長官は、ポンカ族がオマハ族の近くに住むことを弁護していた。
オマハとポンカは婚姻関係もあり、安全。

この地は、Brule族、Oglala族を監視するのに好都合の場所

1876 ポンカ族をLogan Valleyへ強制移住





ポンカ族の保護居留区とその村(1877～1891)

1870年から1877年に掛けて、ポンカ族の八つの部族が彼らの保護居留区の東の外れに、3つの部落に別れて住んでいた。

当初、ポンカ族の酋長達は、飢餓、Bruleの襲撃対策、安全ということで、賛同していた。

これが、“彼らは望んでいた。”という風になり、
……→ 違法な手段となり、後々まで足かせとなった。

Kemble長官の施策

- (1) ポンカ族の酋長達10人を強制居住区に案内し、場所を選定する。
- (2) Washingtonに行き、政府と交渉をする。

しかし、オセージ族は、土地を売却しない

土地は、岩だらけで、生活に役に立たない木ばかり、だった。

Kemble長官とインディアンの首長との対立

Kemble

Standing Bear

Big Snake

を逮捕。

1878.4.11 強制移住の開始

6.18 定住地に到着

病気と飢餓、多くの者が死亡

失望と恐怖

1878.8 もう一度、Niobrara の彼らの故郷に戻してくれるように嘆願

しかし、政府はこれが前例となることを恐れ、これを拒絶 (Hayt 長官)

1878 Salt Fork River の川沿いに新しい居住区を指定
ここは、まずまずの生活が出来る程度に、比較的好ましい土地だった。

しかし、この間に多数の死亡者が出て、Sanding Bear は故郷に戻る決意。
亡くなった自分の息子を先祖のお墓のあるところに埋葬しようと、……

1879.1. 1 逃亡を決行。 僅かの食料を持って
3月にオマハ族の保護居留区に辿りついた。
政府が介入
Standing Bear と 彼の随伴者を拘束

しかし、裁判でStanding Bearの行動が認められた。

1879 元の保護居留区におちつき、
Sanding Bear はインディアンの人権回復のヒーローとなった。

ポンカ族の分裂

北ポンカ族……もとのポンカの
保護居留区 土地の所有権が認められた

南ポンカ族……新しい強制居住区
Cherokeeの土地を
入手

何とか暮らすことはできた。

その後もポンカ族は十分な成果を上げることが出来ず、1972年まで訴訟が続いた。

ポンカ族を苦しい立場に追い込んだのは、
政府の無策によるものと認めさせた。

Standing Bear とその家族



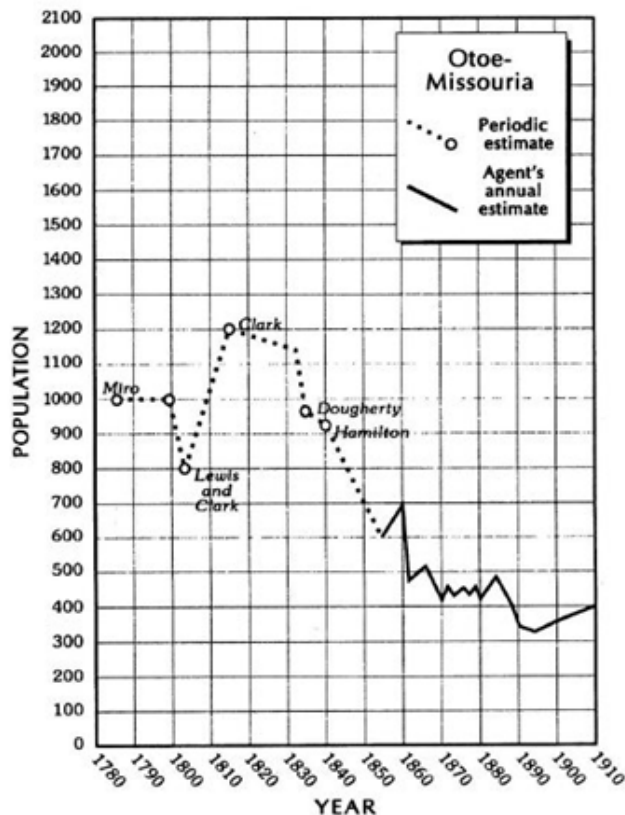
オトエーミズーリ族



オトエミズーリ族

分裂をされたが、征服されたわけではなかった。

独立の兆し 1800～1854



1820年 1,200 人
飢餓、病気、戦闘
社会的な混乱
1836年 964人



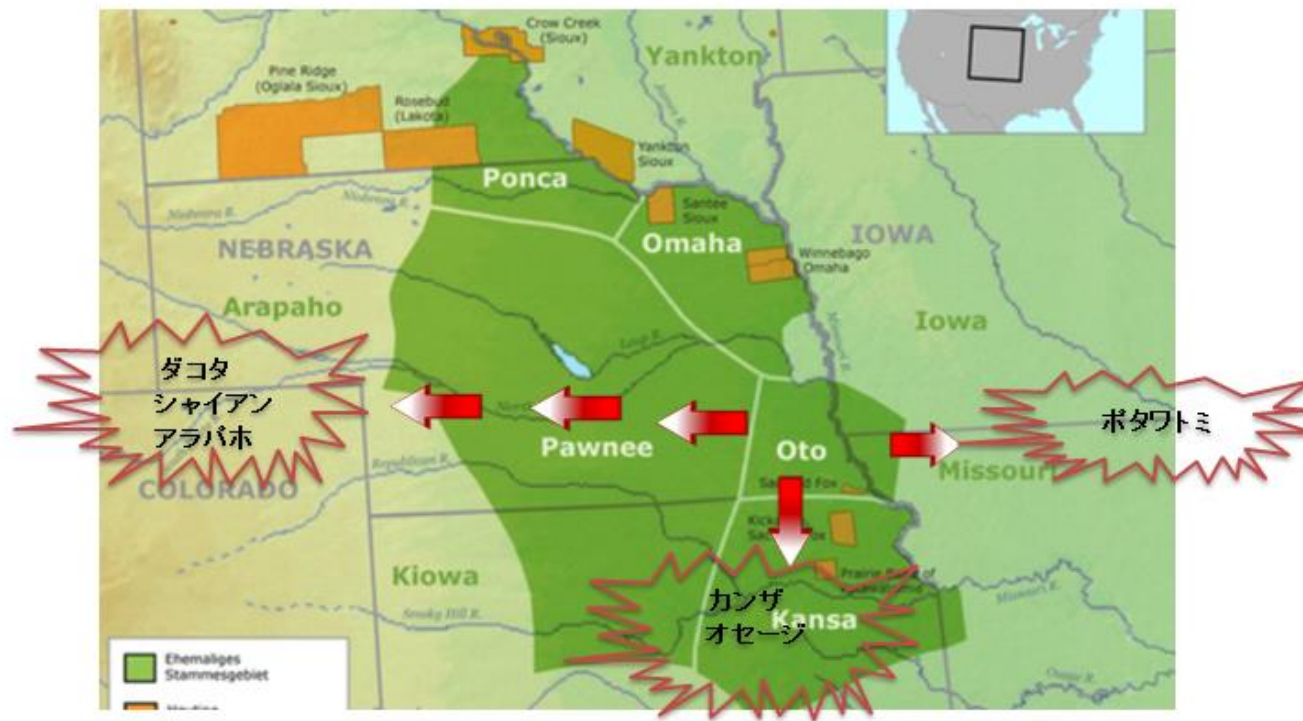
1831～1832

天然痘の大流行

1840年までに、部族の統率力が失われていた。

食料が手に入らなかった。
簡単にアメリカ人と接触が出来た。

分裂



酋長のIetanと2人の男との決闘

1840～

暗い時代

“西部では、最も恥知らずの部族”と言われた。

酒のために狩に必要な馬を手放す。
アメリカ人を襲撃する。
食料不足、マラリア

ダコタ族、オセージ
族の格好の餌食

保護居留区への強制移住 1854～1864

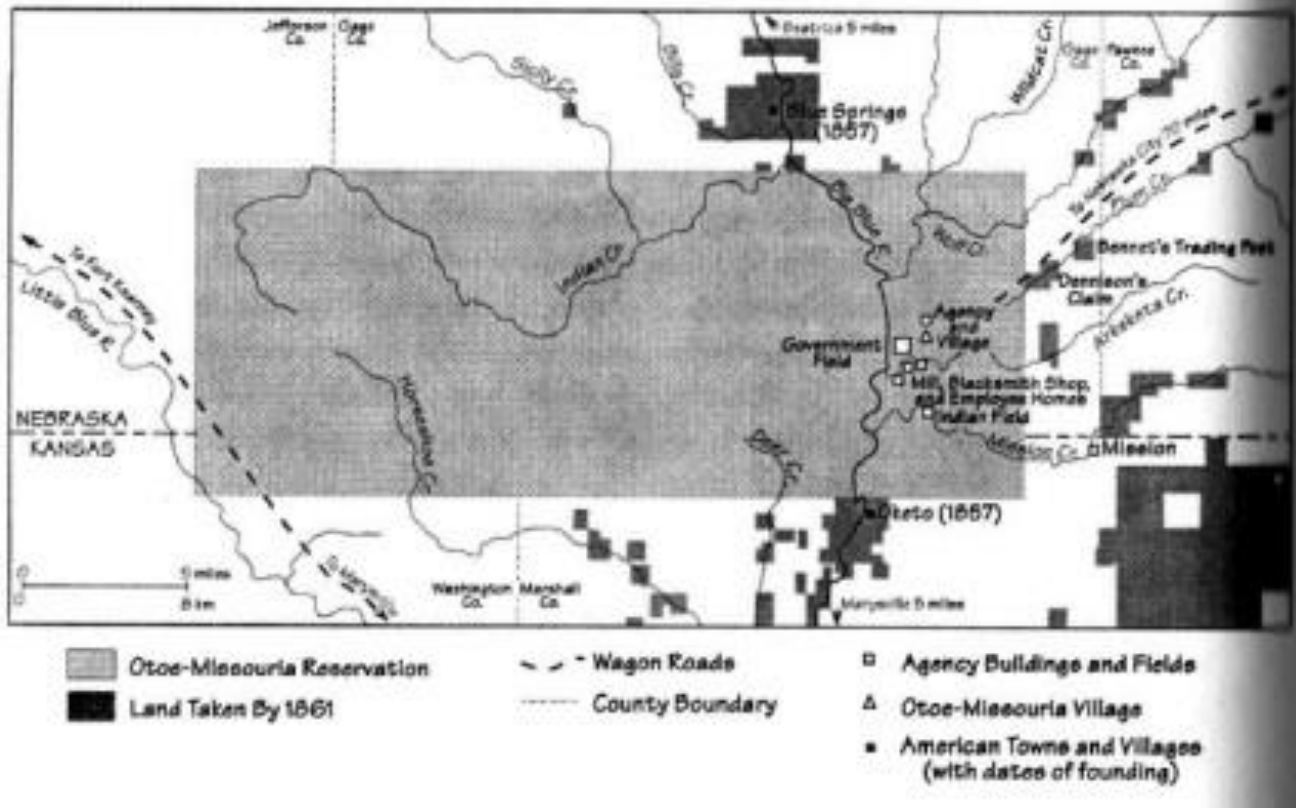
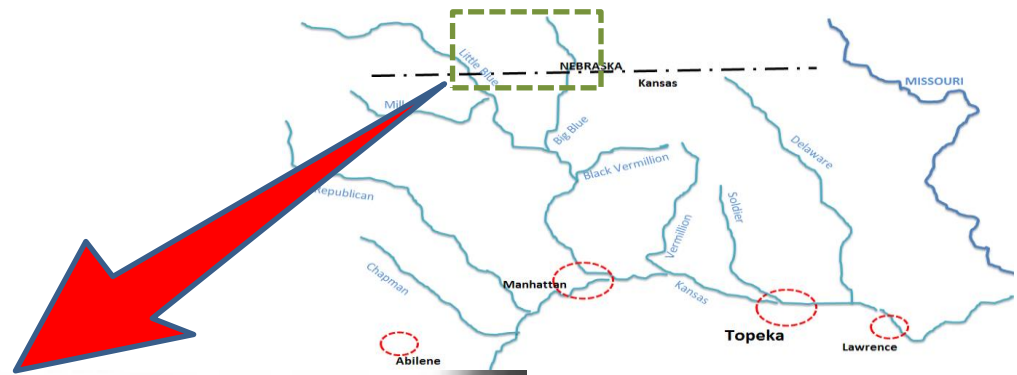
1854 カンザス・ネブラスカ条約

年金と保護居留地と交換に残された
土地のかなりの部分を売却

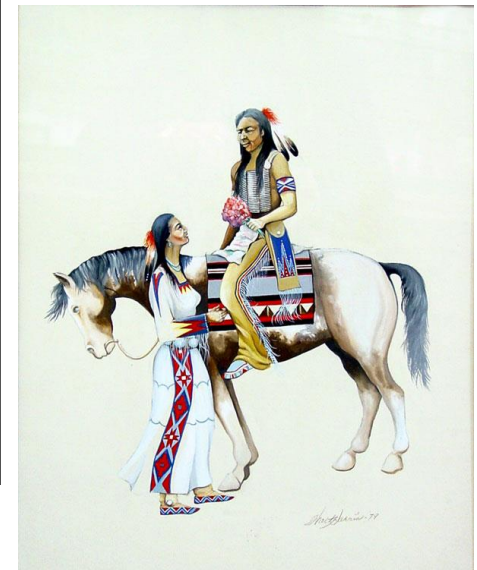
カンザスのBig Blue Riverの川岸 162、000
エーカーの土地に移住
1850年前半は、しばしば狩猟をしていた

比較的肥沃な土地





1861年ころのオトエ・ミズーリ族の保護居留区



保護居留地での生活

墮落と衰退

1866 (Cooley長官)

“以前と同じように全く 野蛮人に近い”

1877 Mix長官 “彼らは逆行している”

アメリカの文明化政策に対して殆ど興味を示さず、

Jenney 監督官 “無知で迷信ばかりを信じている人達”

貧困にあえぎ、苦悩と闘争のぬかるみの中にあった。

1867 大洪水

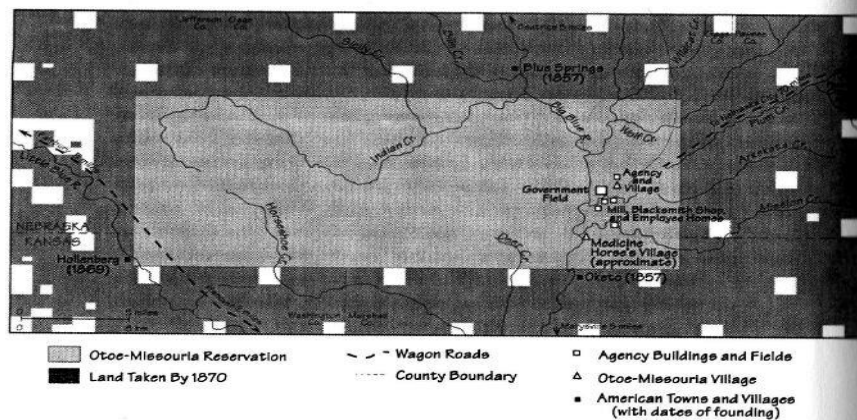
1868 干ばつとバッタの襲来

1869 オマハ族による馬の盗難

1870 オマハ族と友好関係を結ぶ



行政官との対立



1870年ころのオトエ・ミズーリ族の保護居留区

John Smith 行政官 “正直者ではこの地では暮らしていけない”

Ablert Green クウェーカー教徒、面倒見が良かった。

彼は、インディアンの権利を忠実に守ってくれた。

大平原は投資家により使われ、

オトエ・ミズーリ族の居留地の周りは、白人たちにどんどん買占められた。

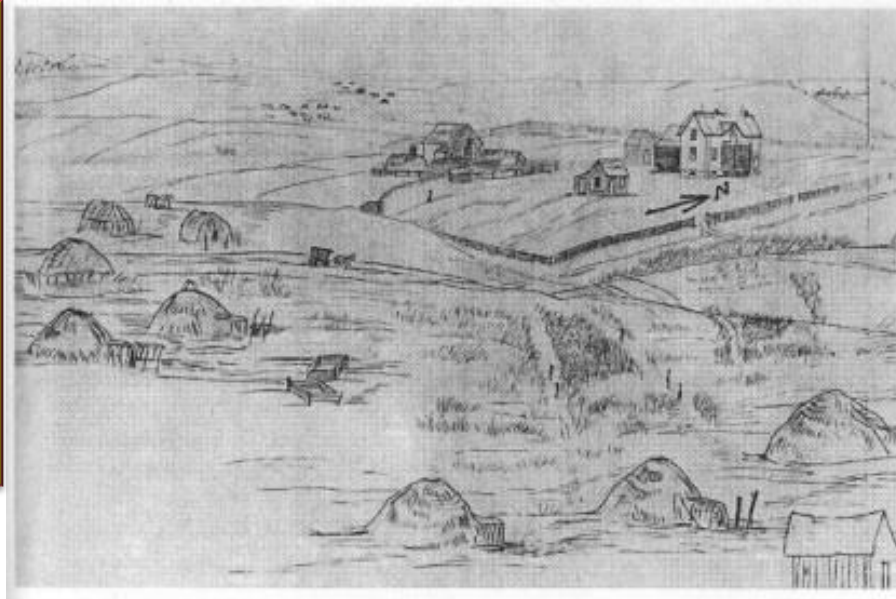
入植者たちが保護居留区の中の森林を容赦なく伐採していた。

土地の売却

生活のために、保護居留区の一部を売却
1869年の協約に基づき、住んでいる土地を
鉄道会社に売却

Smith行政官が、協約の内容をこっそりと書き換えていた。

1870年には、これが取り消された。



Greenの描いた1870年ころのオトエ・ミズーリ族の村のスケッチ

1870～

分断されたが、征服されたわけではなかった。

1870～1881 Big Blue 川沿いの村を売却 → インディアンへの強制居住区
への逃避的な移住
貧困・減少した人口、土地への投資しようと言うアメリカ人

昔からの伝統を守った。…土作りの家、ティピーに住み、自身の医者依存し、男たちは農業に従事しようとしなかった。→ 昔からの生活に戻りたい

部族の中での分裂

落ち着いたある分派

市民化政策に、口先だけは同調
ネブラスカの土地の一部に残ることが
承認された。

Big Elk

対立

野蛮な分派

保護居留区の土地を売り、インディアン
の強制居留区に移り住む
ここで昔からの生活が出来ると考えて
いた。

Medicine Horse Ar-ka-ke-ta

干ばつとバッタの襲来 1873、74、79年

土地は肥沃だったが、収穫は極少なかった。

バイソン狩

1872年は成功したが、1875年にはバイソンが居なくなった。

人口の中の男女のバランスが取れており、この時期には、Bruleの襲撃はなかったが、

干ばつにより、よどんだ水を飲んで、病気が蔓延。

1873年に年金の支給が止まる 農業支援のために使うという名目

世襲酋長達と 行政官 Edward Smith との対立

インディアン達は 保護居留区の全ての土地を売り、強制居住区に移住
Smith は、分配地への移住を遅らせるものだと、何もアクションをとらなかった。

“政府は、自分たちの子供(インディアン)の面倒を見る責任がある。”

インディアンは、“政府の政策を理解していない”と。

これに対し、インディアンは、

“インディアンを白人にすることは出来ない”と、返事



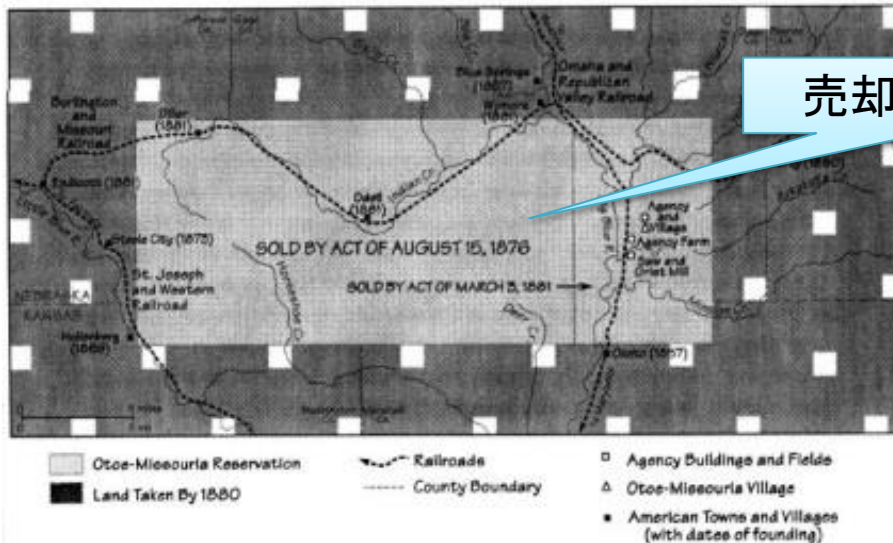
最終的には、再分配の地に落ち着くことになった。

三つ圧力

カンザスの人達からの圧力

入植者たち インディアン土地が目当て
彼らの保護居留区から石油が発見された。

アメリカ人のひつような土地の取立て



売却された土地

1880年頃 殆どが売却された。



Ar-ka-ke-ta 別名 Stay By it



オマハ族

再分配への長い道のり

天然痘の大流行 1800～1801年

1820 2,000人

1831 天然痘が再び大流行
飢餓状態とダコタ族の襲撃で
村が崩壊

分裂の危機があったが

Big Elkが救った。

他の部族からは、全く意気地がないと
言われた。

1830年代終わり……1,400人

1855年……800人

まで、減少したが統率がよく取れていた。

Big Elk 親子

“お互いに丁寧に話さない。”

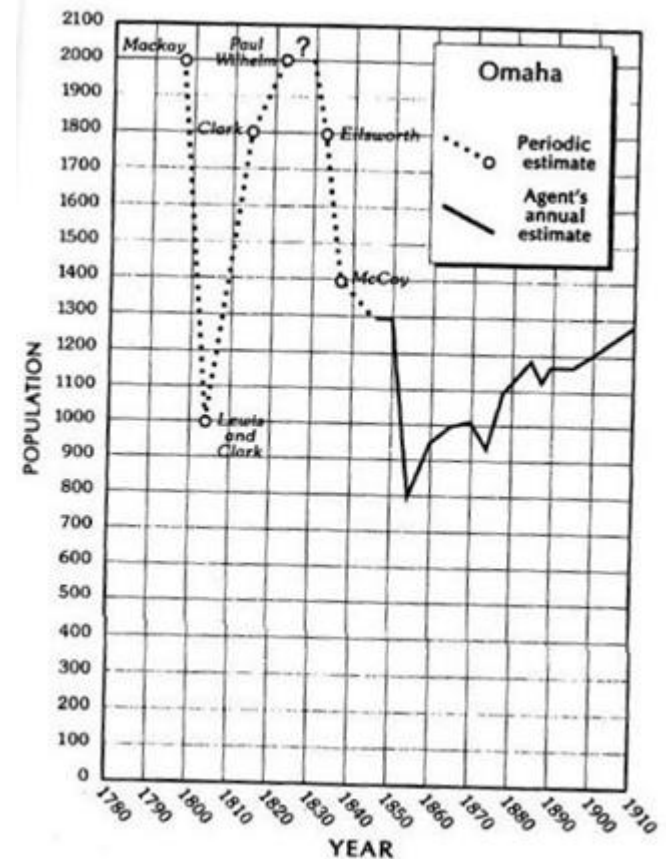
“これからの世の中の流れの中で、たとえトラブルが起き
ても、お互いに相手を助ける行動をとるように”

→ アメリカに友好的だった。

Skyの人々とEarthの人々

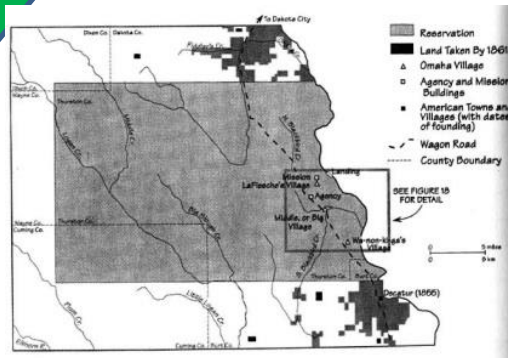
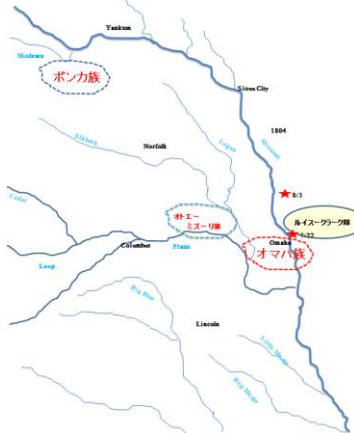
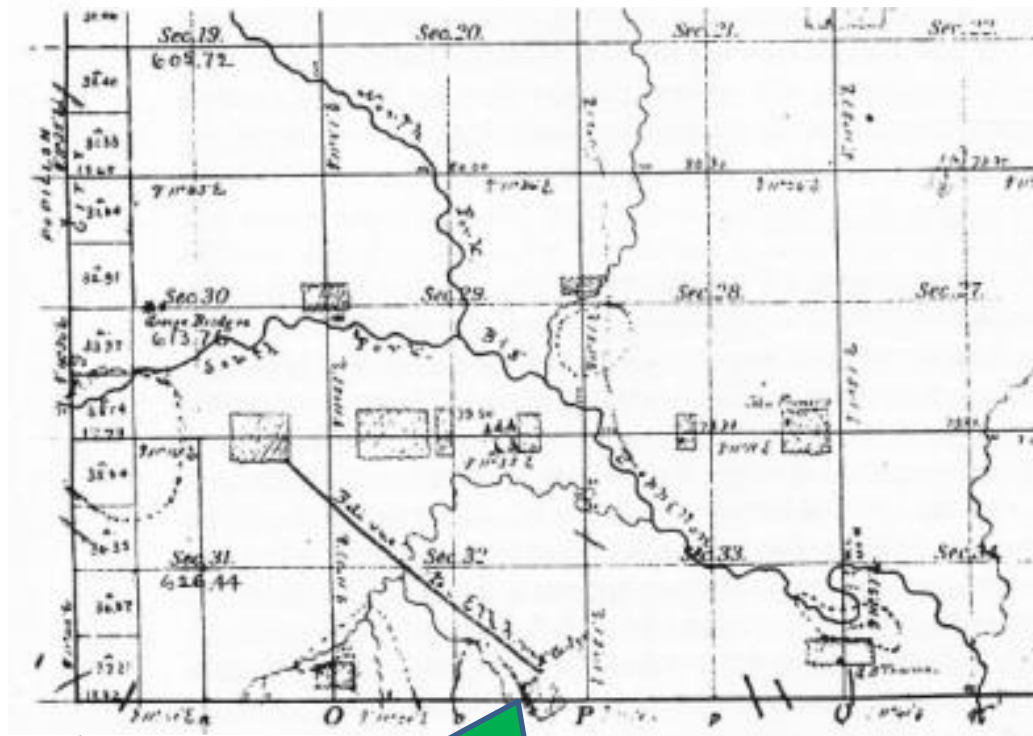
父方の系列で子孫につながっていた 5つの血族
二次的準分属が居た。

血縁外結婚を推奨していたが、村の中に限る。



オマハ族の人口の推移

1856年頃のPapillion クリークのオマハ族の村



1861年 オマハ族の保護居留区の地図

保護居留区への強制移住

1854 Black Hills 312,000エーカーを売却

カンザスーネブラスカ条約

年金と保護居住区と交換に土地を売却

オマハ族は、当初ネブラスカの北部を希望していた。

Black Hillsは、オマハ族のもともとの故郷

入植者と対立 → 政府は出来るだけ南に移そうとした。

Black Bird Creekに移住したが、ここでは、入植者たちと頻繁に接触
略奪行為や、諍いが耐えなかったが、全般的には友好的であった。

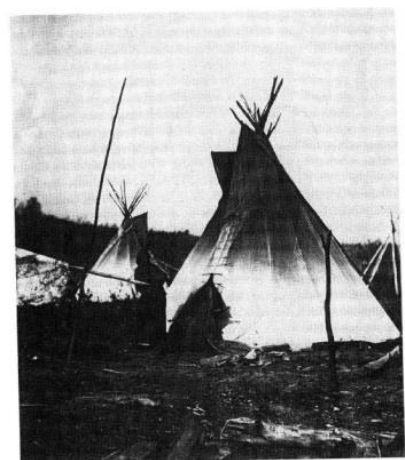
La Flescheの“**Village of Make-Believe White Man**”

農地開拓が上手く進んだ。

Joseph La Flesche

“インディアンが生き残っていく唯一のチャンス”は、“白人になることだ”

彼は、2人の主酋長の一人になり、酒飲みに対する鞭打ちの刑をするなど、オマハ族の繁栄に寄与した。



保護居留地での生活

オマハ族は、唯一栄えたネブラスカインディアン
トウモロコシの豊作
人口が徐々に増えていった。

Joseph La Flesche 等の進歩的な酋長

1860年に二つの事件

一人のオマハ人の男が、“白人の貴婦人”をかどわかし
た罪で告発された。 Little 酋長の姻戚のもの。

1863年

2人のオマハ族の女がDakota Cityにいた四人の兵士に
襲撃された。

1864年

Brule族の襲撃

1868年

Brule族の襲撃

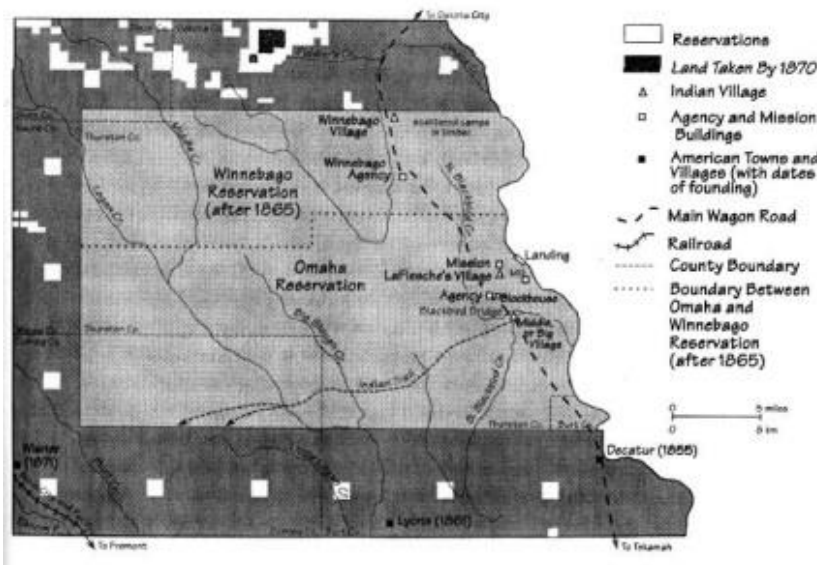
バイソンが次第に少なくなっ
ていったが、Sand Hillには、
エルク、鹿などがまだ残って
いた。

オマハ族に農業を強いるために保護居留
区から出るのに許可証を発行

La Flesche の庇護を受けたアメリカ式のやり方

1860年代

ポンカ族やウィネバゴ族に
分けてやっていた。



1870年 オマハ族の保護居留区の地図



教育を受けたオマハ族の酋長達 1865年



教育を受けていないオマハ族の酋長達 1865年

閉じ込められ、そして、追い出された時代 1870～ 1885

再分配への長い道のり

オマハ族が保護居留区を守り続けることが出来た、二つの理由

(1) 優れた農民たちであった

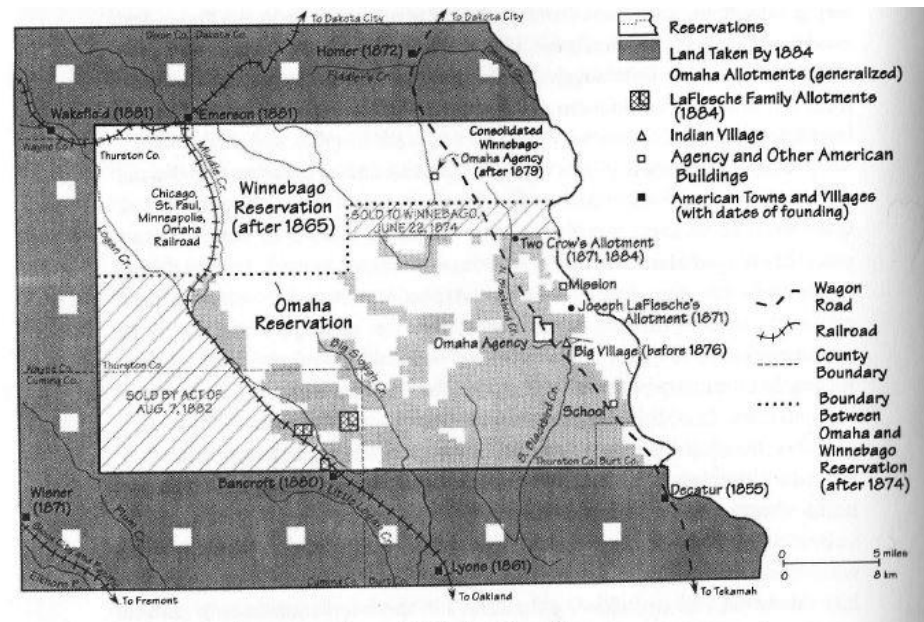
政府の指標に向い、上手く進歩し続けた

(2) 有力なアメリカ人たちの支援により、安全な土地にしておいた

Thomas Henry Tibbles ; Jeseoph La Flesche の娘と結婚
Mames Owen Dersy
Alice Fletcher

トウモロコシ、ジャガイモの収穫があり、
1876年まで、毎年狩に出かけ、成功していた。

Two Crows酋長
1879年学校の再会
1880年代の初め 強制的入学



1880年頃 オマハ族の保護居留区とその村

部族の中の分極化

保守的な人々
伝統的な生活習慣
自分たち自身の力を維持

対立

進歩的な人々
若い世代
アメリカ式教育
土地の再分配政策を維持

行政官の Jacob Vore が応援



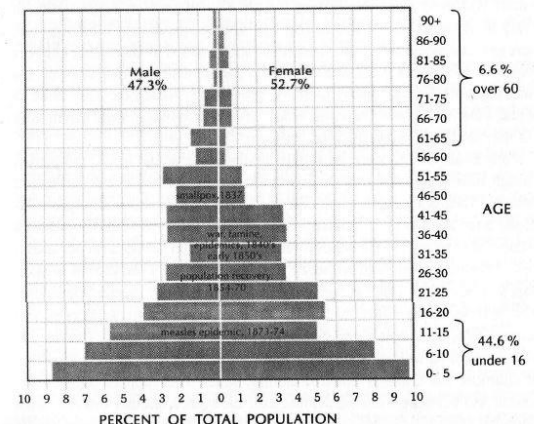
酋長達による委員会を設立



オマハ族に対する弾圧が始まった

Painter の発行した、再分配された土地の所有者として認める証明書……何の意味もなかった。
1872～1882に土地の売却をテスト

不景気になり、土地の価格が上がらなかった。



オマハ族の人口分布のピラミッド
1886年

非常に影響力を持った酋長達の嘆願書 “自分たちの権利”

Alice Fletcherは、
政策の立案者を彼女のシナリオに引き込むために
政治家たちの奥様や夫人たちの作っている組織に通う。
→ 法律が見直され
“土地の所有が一時的に認められた”

Logan Creekに沿った土地の売却



ここに鉄道が敷かれた

再分配された土地以外の余った土地の所有も認められた

1882年 Alice Fletcherが特別行政官となる。



Alice C. Fletcher

インディアンたちの不満の1つ……自分たちの妻が独自の土地を
所有することが出来なかった。



この問題を解決

再分配された土地の管理を自らの手で

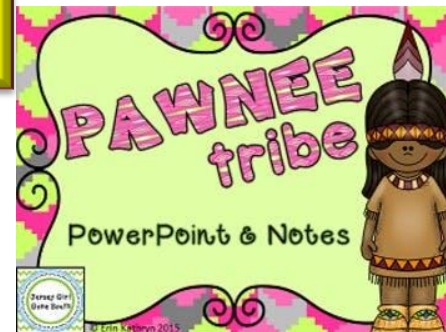


ポウニー族



閉じ込められ、そして、追い出され

ポウニー族



もともと中央平原部に住んでいた部族

Skiri (Loup) 一族 **Loup**川の北側のテラス台地に部落を作っていた。

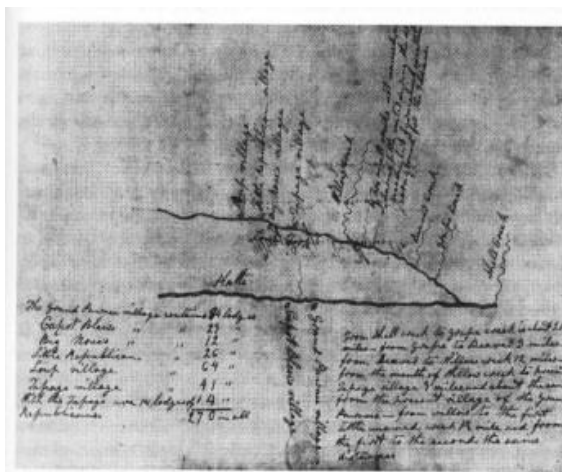
Chawi (Grand) 一族 **Shell**川(**Cedar**川)の東

Kitkahahki 族 **Republican**川沿い

ポウニー族は、いつもトウモロコシを崇めていた。

1714年までに、馬を手に入れ、オマハ族やオトエ族との取引をしていた。

これにより、各部族の狩猟、移動、襲撃の範囲が格段に広がり、生活が非常に楽になった。



ポウニー族の村

天然痘の大流行 1800～1801年

1820 10,000人
1831 天然痘が再び大流行
人口が半減

独立の兆し 1800～1854

Santa FeやRio Grandeに襲撃を繰り返していた。
弱ったときに、Dakota族(Oglala, Blure)が襲撃

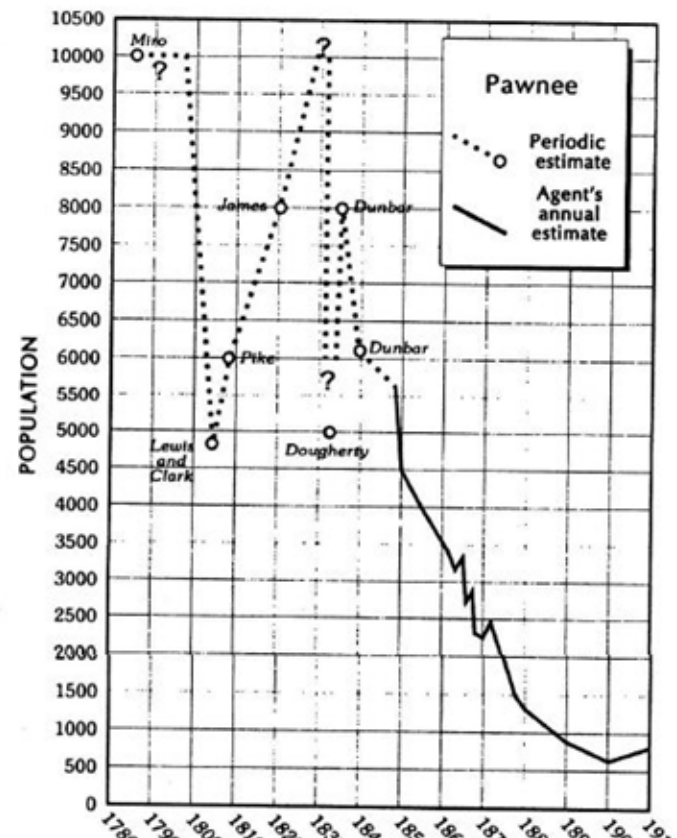
1840年代になり、白人が西部に侵入 ポウニー族は、
オレゴンレイル、モルモンレイルの街道筋に住ん
でいた。

ポウニー族による略奪の繰り返し

Kitkahahki族、Chauli族は、Santa Fe辺りを襲撃し
ていた。

Sircherish血族はとりわけ悪評が高かった

アメリカ政府は、多くの部族を一緒にしようとした。
取引商は、部族間同士の対立が商売を伸ばすと考えていた。



敵愾心が旺盛で、不誠実な部族

と言われた

保護居留区への強制移住

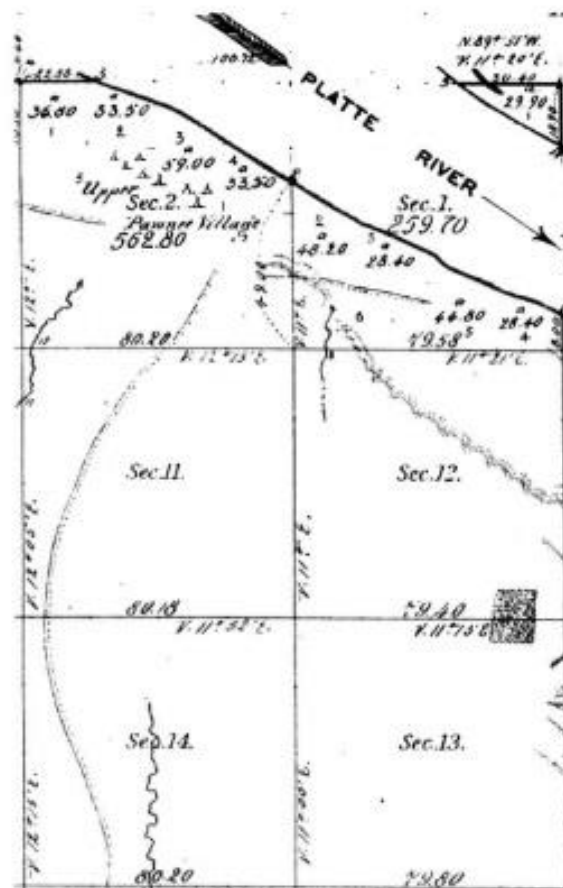
1854~1861年

1857年 年金と保護居留地と交換に
残された土地のかなりの部分を売却
ポウニー族は、Loup川(288,000エーカー)を
残して、他は売却

ポウニー族の人口の回復

400~500人 → 3,414人(1861)

1856年 オマハ族との間で大事件
オマハ族が自分たちの土地(Shell Creekの西側)を売却した。
トウモロコシが殆どなくなり、飢餓状態
草原では、ダコタ族が待ち伏せ。



上流ポウニー族の村 1858年

アメリカの行政官は、ポウニー族に襲撃を受けていた白人のほ
うに目を奪われていた。

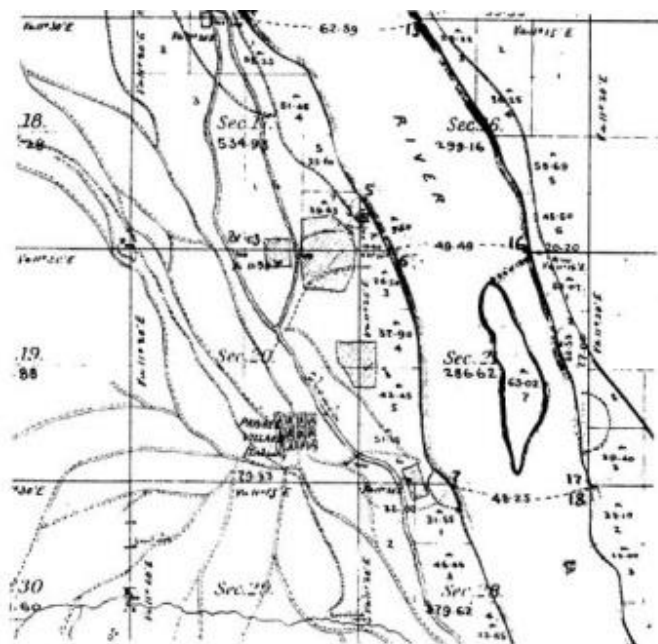
1857年 Chaui の酋長 TeRaetaitsが殺された。

馬を奪った入植者の家に物乞いに行った。

これら、インディアンが復讐 → 白人の退却 → 市民軍の結成
.....→ パニック状態

悪徳取引業者 ウィスキーの販売、生活用品の買い占め

ダコタ族と離れたところに住んでいたが、不利な条件で保護居留
地への移住に同意



下流ポウニー族の村 1858年

1859年 ダコタ族の襲撃にあい、追い出された。

保護居留地にモルモン教徒が入ってきた。

モルモン教徒は居座りを主張したが、受け入れられず、西に
移動 → ユタ州へ

シャイアン族

ブルーレ、オグララ・ダコタ族

(銃を持っていた)



ポウニー族が夏の狩猟に出かけて
いる時に村を襲撃

多くの女性が殺され、労働力が減少



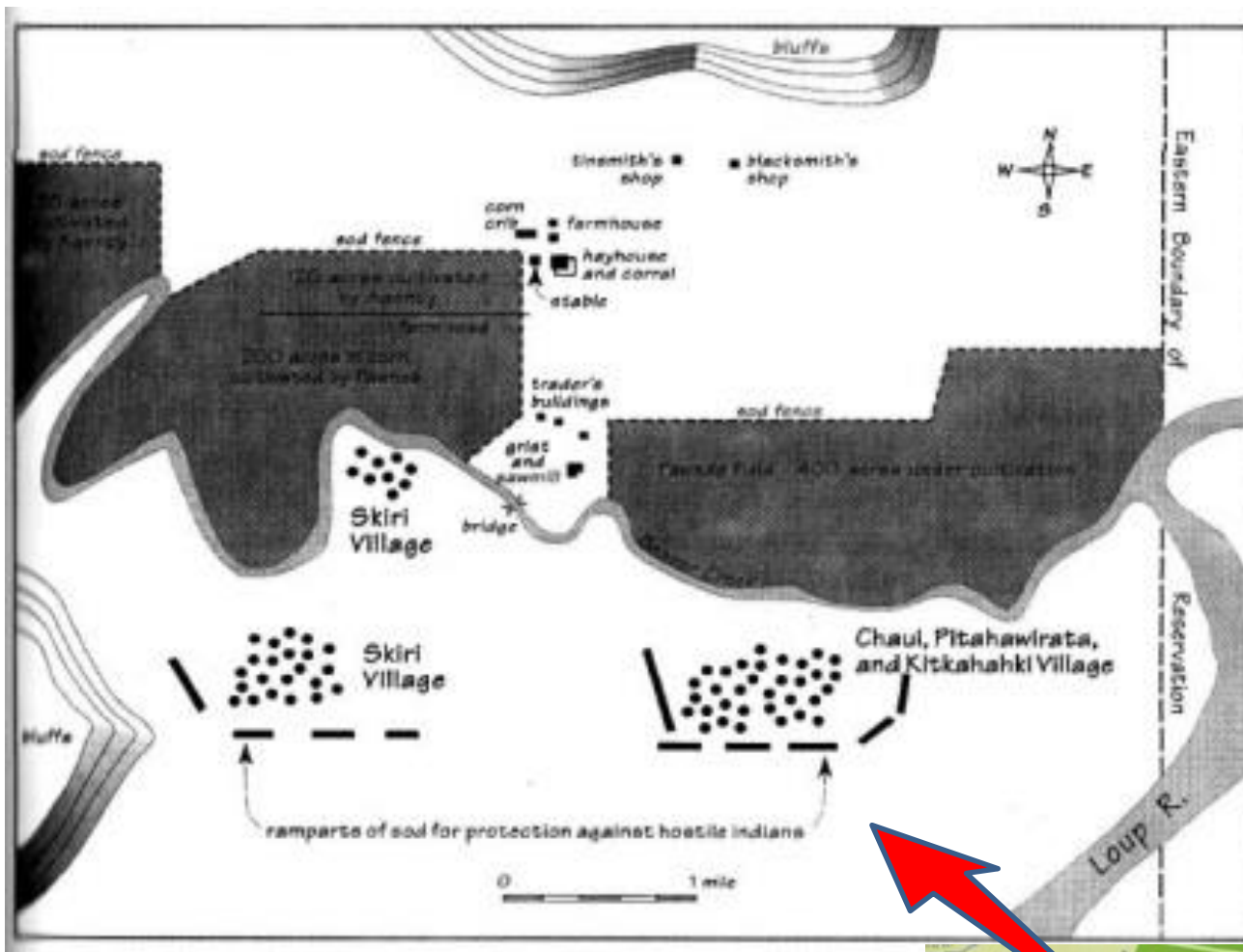
貧困

ダコタ族の襲撃は、行政官の失態を紛らわす格
好の材料だった。

政府は、ポウニー族には意図的に銃を渡さなかった。

取引商たちのごまかし

穀物の凶作が毎年続いた。



ポウニー族の保護居留区

1861年



保護居留地での生活

1860年代

1862年 **Lushbaugh**が行政官として着任

1864年 **Brule**族の襲撃

1865～1867年のバイソンの狩は成功

1868年 バッタの襲来

この時、ポウニー族は半分飢餓状態

2年間続いた干ばつによる作物の不作

バッタの襲来

Brule族、**Yankton Dakota**族の襲撃

政府の援助

ティピーの覆、カリコの布と衣類、布、毛布、ピーズ
くわ、斧、煙草、その他食料など



バイソンの狩猟がいつもBrule族に妨害された。
収穫があると、Brule族に襲撃された。

繰り返し

干ばつによる作物の不作

バッタの襲撃

何故、ポウニー族がBrule族の襲撃にあったのか
ポウニー族は馬の繁殖がうまく、沢山の馬を所有していた
シャイアン、ダコタ族に対する白人の軍にポウニー族は、
斥候として参加していた。

鉄道の敷設により、バイソンが居なくなった。

→ 部族間での対立につながった

1869年 軍の部隊が、14人のポウニー族の勇士の集団を襲撃

Platte川の中州での襲撃事件（McMurtyが殺害された）
犯人と間違えられて、ポウニー族の者が捕らえられた。

ポウニー族に対する政府の締め付けが厳しくなっていた。



閉じ込められ、そして、追い出された時代

1870年～1885年

最も重大な自由の剥奪は、ポウニー族を保護居留区に拘束しようと言うものであった。

1873年 Chaui 族 27人

Big Spotted Horse らの兵士 485人

Wichitaの行政地区に向かう(移住)

1874年 Skilri族だけを残し、ポウニー族が 保護居住区から強制居住区へ退却(移住)

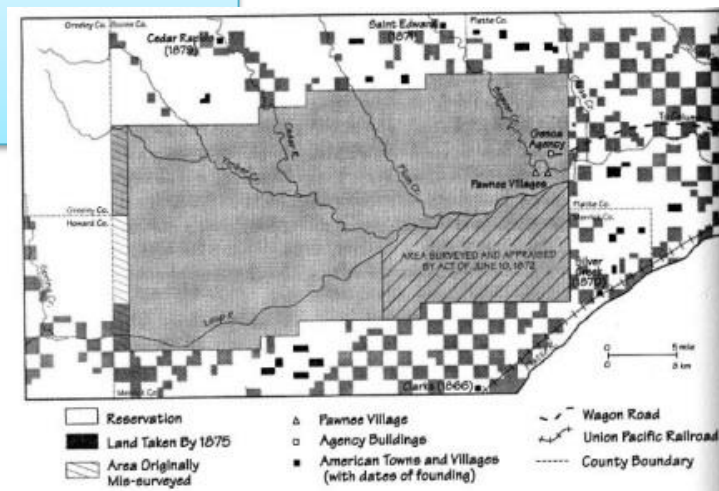
行政官のBurgessは、ポウニー族を助けようとしたが、移住の度に“狩場の権利”を放棄して行った。

第二陣 1,000人がネブラスカからウィチタに移住

行政官のWilliamsonが率いた。

が、残った人達をダコタ族が襲撃

1875年 370人が移住



ポウニー族の保護居留区

1875年

新しい土地は、ネブラスカより良いことは何も無かった。

病気(マラリア、天然痘)が流行し、人口は、1,045人まで減少
(1870年、2,050人)

ポウニー族の人口の比較(1840年との比較)

Table 8 Pawnee Demography, 1872 (and Comparisons with 1840)

<i>Band</i>	<i>Men</i>	<i>Women</i>	<i>Children</i>	<i>Band Total</i>	<i>1872 as Percentage of 1840 (see Table 5)</i>
Skin	154	232	244	630	33.00%
Kithahahki	124	208	218	550	30.10%
Chaui	140	254	365	759	45.10%
Pitahawirata	91	182	235	508	54.70%
Pawnee Total	509	876	1,062	2,447	38.40%

Source: Troth, "Report," ARCIA, 1872, 224 (from census count taken Sept. 20 and 21, 1872)



男達が少なく、子供が異常に多い

戦闘に行く者、

Dakota族の襲撃による、飢餓状態

1873年 Oglala族、Brule族の襲撃、

Massacre Canyon(ネブラスカ)



合衆国政府

ポウニー族に対して、鉄砲を購入することは自由だ として、支給を拒否。しかし、ポウニー族には手当てが支給されず、その金は、なかった。

一方、ダコタ族は、襲撃を繰り返し、いくらでも鉄砲を手に入れていた。

入植者たち

インディアンは怠け者であり、有り余る土地を所有していながら、殆どそれを利用していない。その上、政府から気前のよい援助をされている。

不景気になり、入植者たちは貧乏生活をしていた。

ポウニー族の所有する土地の森林伐採・盗難が続いた



ポウニー族の女達 1870年頃



Genoa Manual-Labor School
1870年頃



ポウニー族の村 1871年

お断り

本レポートの内容は、

David J. Wishart の “The Dispossession of the Nebraska Indians” に記載されたものを要約、再構成したものです。誤訳しているところがあるかも知れませんので、専門的に研究をされる場合には、原書に従ってください。

また、写真につきましては、次のような書籍

“The Omaha Tribe” Alice C. Fletcher & Francis La Flesche (1992)

“Indians of the Plains” Robert H. Lowie (1982)

“Lewis & Clark” Dayton Duncan and Ken Burns (1997)

“Lewis & Clark” Carolyn Gillman (2003)

“Lewis & Clark” Bull Yenne (2005)

“North American Indians” Herman j. Viola (1996)

“Daily Life in a Plains Indian Village 1868” Michael B. J.Terry (1997)

“The Native Americans ” Betty and Ian Ballantine (2001)

ならびに

printerest.com, indianspictures flagspot.com, victorianan.com, crwflags.com, rubylane.com, Teacherspayteachers.com, crazycrow.com, poncatribе-ne.org, en.wikipedia.org, powneenation.org, nebraskastudies.org, etc.

その他の、American Native Indians に関するsiteに公開されたものを引用させていただきました。この場を借りて御礼申し上げます。また、引用に問題があれば直ちに削除しますので、ご連絡ください。

また、当サイトの内容については、個人的なものですので、無断引用はご遠慮ください。

連絡先

kentaurus@catv296.ne.jp



ありがとうございました。